



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

<Policy Topics>記憶を記録へ：デジタルアーカイブを活用した阪神淡路大震災を語り継ぐための取り組み

著者	藤本 真一
雑誌名	総合政策研究
号	60
ページ	81-84
発行年	2020-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028514

記憶を記録へ～デジタルアーカイブを活用した阪神淡路大震災を語り継ぐための取り組み～¹

Recording Memories ~The Efforts to Hand Over the Great Hanshin Awaji Earthquake by Using Digital Archives

藤本 真一²
Shinichi Fujimoto

始めに

私は2009年関西学院大学大学院総合政策研究科(メディア情報学専攻)を修了した卒業生で、学生時代は映像制作を用いた情報発信を学んでいた。2011年3月11日、テレビで東日本大震災の津波によって街が流される映像を見て「何かお手伝いしたい」との思いになり、ホームページで偶然見つけたNPO法人阪神淡路大震災1.17希望の灯り(通称:HANDS)の東日本大震災支援活動に参加。被災地の様子やボランティア活動をビデオカメラで撮影し、発信・残す活動をする中で、過去の震災体験を語り継ぐことの大事さを知り、私が10歳の時に経験した阪神淡路大震災を伝えて行く活動にシフトしていく。

2014年にNPO法人の代表理事に就任、2015年からは毎年1月17日に神戸市中央区東遊園地で竹

灯籠にローソクを浮かべて行われている追悼行事「阪神淡路大震災1.17のつどい」の実行委員長に就任。仕事の傍らで阪神淡路大震災の経験や記憶を知らない若い世代に伝えていくための活動を行っている。

2013年から2016年までは関西学院大学総合政策学部授業「メディア情報演習・表現」の映像編集テクニカル講師を務めていたことから現役学生たちと交流する機会を与えられ、一部の学生から「震災関係のボランティアをしたい」との申し出があった。私は「阪神淡路大震災1.17のつどい」当日の記録映像や、ご遺族や被災された方々へのインタビューを通して、震災のことを学びながら映像制作の手法を実践する場所として学生たちへの参加を促した。

関学の先輩後輩という関係からスタートしたこの取り組みは7年経った今も、学生たちも後輩へと引き継がれ、継承している。近年はメディア情報学科の学生を中心とした有志団体「Kwansei Gakuin SPS Maker」(三砂安純・中川侑海・春口桃奈・東浦由真・北野こゆき)を立ち上げ、活動内容も震災当時の写真や動画をデジタル化し、提供者へのヒアリングを行いながら、アーカイブしていく内容へと変化・進化している。

本稿はこれまでの活動経緯と、総合政策学部授業「アーカイブデザイン」にて2019年5月30日(木)から3週に渡って実施されたワークショップの報告である。

きっかけ

1995年1月17日に兵庫県南部を震源とした阪神淡路大震災の発生からまもなく25年が経とうとしている。犠牲者は6434人、負傷者43792人という戦後最悪の被害をもたらした大地震も被災地神戸では約4割の人は震災を知らず、経験者の高齢

1 本稿は2019年5月30日(木)本学神戸三田キャンパスでの講演をもとにしたものである

2 NPO法人阪神淡路大震災1.17希望の灯り 代表理事

化・減少により語られることは少なくなり、街並みからも当時の面影を感じられる場所はほとんどない。

今後ますます風化していくことは避けられないが、自然災害の増加、近い将来起こるとされている東南海地震の発生が懸念されている今、改めてあの日の出来事を生き残るための知恵に変え、経験していない次世代にどう語り継いでいくのか？その関心は年々高まっている。

25年の月日は伝えていくための資料や記録の形も大きく変えていった。現代では様々なものがデジタル化されているが、震災当時はほとんどが紙ベースで、アナログだった。行政・研究機関等ではある程度はデジタル化されているが、一般市民の手によって撮影された当時の記録も写真はネガフィルム、動画はテープのまま残され、所有者の多くが高齢になられていることから自ら変換することが難しい。既に資料が劣化していたり、保管にも嵩張ることで知らぬ間に破棄されていることも多いと聞く。

今後ますます貴重になるこれらの記録を保存・残し、伝えていくためのツールとして活用することを目的に、写真や動画のデジタルアーカイブ企画を立ち上げる。流れとして、震災から23年を迎える2018年1月17日に「阪神淡路大震災1.17のつどい」会場にテントブースを設置し、写真やビデオテープを持参していただく。提供者のヒアリングを行いつつ、その場でデジタル化し、オリジナルはお返しすると共に、データは伝えていくための資料として活用させていただくというものである。また、この作業を大学生たちに提供することで、日頃は目にすることがない震災当時の様子に触れ、被災者と直接お話することで、震災を知る一つのきっかけになればと考えた。

メディア報道等を用いて資料提供を呼びかけた結果、2日間で38名・20本の映像と約500枚の写真が寄贈された。予想以上の反響に学生たちは休む

間も無く作業を続け、その様子もまた若者の新たな取り組みとして多くのメディアから注目を集めることになった。一方でこれらの資料をどのように公開、活用すべきか？という部分に関しては結論が出ず、翌年度以降の課題として持ち越された。

SNSを活用しての公開

現代において収集した写真や動画をより多くの人と共有するためにはウェブ上での公開は不可欠であり、私たちが取り組む以前からも独自にホームページを作成し、閲覧できるサービスを提供する機関は複数存在する。見せ方も撮影された地域や被災のシチュエーションなどで分類したり、地図上にマッピングするなど工夫がこなされている。

震災を知る私たちに向けての見せ方はこれでいいのかも知れないが、知らない世代に伝えるためのツールにしていくためには撮影者や経験者たちの「語り」が重要である。写真や動画に対し、コメントを残せたり、閲覧者同士が交流できるような機能があれば人々の記憶も記録として残すことによる語り継ぎのプラットフォームにすることができるのでは？と考え、これらの要素を結び付けることができる場所としてSNSに着目。

「Facebook」のページ機能を使ったバーチャル空間の歴史博物館「1995.1.17kobe(<https://www.facebook.com/1995.1.17kobe/>)」を作成した。一般的なSNS機能やユーザー同士の繋がりという部分に加えて、このページでは写真や動画を発生時刻の1995年1月17日5時46分から現在に至るまで時系列に分単位で配置することができ、災害発生直後だけではなく、24年経った今までの復興への歩みや想いも一緒にまとめることができる。

震災から24年目を迎える2019年1月17日も昨年同様に資料提供を呼びかけ、合計で約10000点が集まり、そのうちの2500点を公開した。この取り組みにフェイスブックジャパン社からも協力を受け、協働で更なる整備を進めている。

新しいアーカイブをデザインする

総合政策学部授業「アーカイブデザイン」の講義において、これまでに提供された資料の活用方法を受講生180名と一緒にアイデア出しをするワークショップを実施させてもらった。

1週目2019年5月30日(木)は私の講演後、学生たちには

- ・ 今後、このアーカイブをどう仕上げていくといいか？
- ・ 今後、このアーカイブを利用して、どんな提案ができるか？

をレポートで提出、

2週目2019年6月6日(木)はレポート案を元に、

- ・ 新たなアーカイブをどう作り、どうデザイン(利用・提案)するか？

をグループで考え、

3週目2019年6月13日(木)は私も参加した上で、学生たちに考えられた新しいデザインを発表してもらい、フィードバックするという流れである。

私からは現実的なアイデアを考えてもらうための条件として

- ・ 予算は5万円程度
- ・ 資料はツールの一つ
- ・ 唯一である必要性はなし
- ・ 学生らしさを大切に
- ・ 実現可能なもの
- ・ SNSを使っでの呼びかけ手段はなしを課した。

学生からの提案として ・InstagramやTwitterなど他のプラットフォームへの転用 ・VRによる擬似体験 ・撮影場所のマッピング ・当時と現在の定点比較 ・言語変換による世界に向けた発信 ・QRコードを活用した情報誘導・映像コンテンツ作りなど、自分たちの知らない過去と現在をデジタル上でリンクさせることによって経験者に近づくことを目指したものが多かった。

一方で、・展示会の実施・写真を大型ポスターとして印刷し、街行く人たちの目に止まるように見せる場所づくり、・学習教材としての書籍化 など、デジタル上では関心を持ってもらうことが難し

く、アナログの方が印象に残りやすいとの考えから、あえて紙に印刷した方が効果的だという提案も多く、デジタルが当たり前の時代を生きている若者らしい発想や捉え方が印象的だった。

終わりに

今回の講義内で共に活動をしている「Kwansei Gakuin SPS Maker」のメンバーは受講生である同級生たちに「震災を知らない私たちは当時の出来事を語ることは難しいが、知った知識を形を変えて発信することができることがわかった」と語った。3年前までは何も知らなかった彼女らも、今では立派な語り部へと成長した。

基礎的なことから丁寧に教えつつ、各々が持っている個人的な興味分野と繋いであげることで、出来事の詳細ではなく、経験者が抱えている想いを共有することができたのだらうと思う。同時に、若者が感じた想いを「伝える場所」を用意していく重要性も認識させられた。

今年からの新しい取り組みとして 2019年12月6日～15日神戸ルミナリエの会場「慰霊と復興のモニュメント」にて若者を中心に展示や語りを通じて、震災を伝えていく場所を設置する。

「記憶を記録へ、そして記録から記憶へ」自分たちが生まれる前の出来事に耳を傾け、知り得た知識や想いを新しい形に変換し、デジタル時代の次を目指して伝えていく…

私もこれまで蒔いた種がどのように成長していくのかこれからも見守っていきたい。

